

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究
(B) (1)、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

7 塩崎 弘明氏

しおぎき ひろあき 長崎純心女子大学・文学部・教授

日時：1998年5月22日

出席者：伊藤隆 伊藤光一 季武嘉也 有馬学 梶田明宏 武田知己

塩崎 調べものを始めてから結構な年数がたつのですが、まず、卒論でスペインの内戦と日独伊関係のことをやりまして、次に修論でナチスの教会政策のようなものを行いました。スペインの内戦のことは、卒論ですから中身は全くお粗末なのですが、問題関心はずっと続いておりまして、聴き取りとか史料集めなどをしてきました。スペインの内戦は1936年に始まるのですが、ちょうどそのころだったと思いますが、駐在武官としてマドリードに派遣された守屋精爾という人がいまして、この方が東京に送った内戦に関する電文がございまして、それを外務省の史料館で見ることがありました。外務省のその史料というのは非常に断片的なものだったんですけども、内容自体が日本側からフランコのほうにと、フランコの側から艦船の譲渡要請がありまして、その要求を守屋が中に入って参謀本部のほうへと、駐在武官ですから参謀本部の次長で当時多田（か）……はっきりしないんですけども、軍のほうともうひとつは外務省を、広田がたぶん外務大臣だったと思うんですけども、守屋が仲立ちをしたわけです。これはフォローしてみたいということで、岡山にご遺族がいらっしゃるということで、実際に出かけていって聴き取りをやったり、史料があれば見せていただくというようなことをはじめました。

39年に内戦は終わって、日本は非常に早い段階でフランコ政権を承認するわけですが、42年ぐらいだったと思いますが守屋はタイのバンコクの駐在武官になって、それで大戦中に亡くなります。奥さんが健在で、それほど系統だった史料ではありませんでしたが、実際にマドリードで武官に任ぜられた時代のメモのようなものとか、7ミリぐらいのものですがフィルムを写し撮っておりまして、そういうものをご遺族の方から見せていただきましたが、守屋の日記とかはございませんでした。ですけどもメモのようなものがあって、その中には当時公使で赴任する須磨弥吉郎との接触に関するようなものもあったし、それから後に軍事課長になる西浦進との話し合いのメモがありました。西浦が参謀本部のほうから、対ソ戦を前提にしてドイツが・・・これは最近では内戦関係の本にはよく紹介されていることですけども・・・飛行機を

はじめ開発した武器を内戦でヒトラーあたりが使いはじめるということで、それからソ連も参戦するというので、ソ連の武器等々に新しいものがあればということで派遣されるわけですが、メモですので限界はありますが、そういうものを見ることができました。

そういうものを使ってちょっとしたものを書いたことがあったのですが、そのあたりから史料を集めて、日独伊関係をきちんと押さえていきたいと思うようになりました。そのあと伊藤先生が声をかけてくださって、『近代日本研究』の創刊号に何かまとめたものを寄稿させていただくということで、それまでいろいろと手紙その他で連絡をとっていた新庄健吉の文書に当たることになりました。70年代の半ばぐらいだったと思いますけれども奥さんがご健在で、最初はしづられていたのですが、「お見せしてよろしいですよ」ということになり、積水の大阪支社にいるご長男に直接当たって諾否を確かめてくれということで、大阪まで出向いたことがありました。これは箱にして2箱ぐらいで、まだ私の研究室にあります、それほど系統だったものではありません。この間に亀井貫一郎さんとか矢次一夫さんにインタビューすることがあったのですが、不慣れなもので、矢次さんに会ったときにはまるっきり私自身も煙に巻かれてしまいました。国策研究所の事務室だったと思うのですが、インタビューしているときに電話がかかってきて、政界がらみの話のようなものをしていたということはわかるんですけども……、時間は2～3時間はとっていただいたのですが、間に客が入ったりして、緊張していてほとんど思うようにはいきませんでした。その頃は、直接この人から生の声を聞いてというようなことで、それで満足するぐらいの程度だったんです。亀井さんの場合は、インタビューと言いましても直接お会いしたことはありません。電話で4～5回ぐらいでした。長時間でしたが、これがまた、お会いになった方は私に接した接し方と違うかどうか知りませんが、もうほとんどご自分でしゃべるようなことで、その話自体も非常にどこでどういうふうにつながるのか……私のほうでどう検証していけばいいのかわからないようなところもございました。

この新庄の文書を見る中で、一部分なんですけれども日記があるんです。その日記というのは彼が永田鉄山から命ぜられてソ連に出向くというようなことで、彼は主計畑の出であり表面には出ないんですけども『近代日本研究』の創刊にも書きましたように、武藤あるいは亀井貫一郎なんかにすれば、武藤との連絡役は新庄がとるというようなことでしたが、統制派の動きといたしましうか、政治的な動きをきちんとフォローできるような史料ではないんです。彼の資料の中でいちばん大きい部分を占めているのは、ソ連での5カ年計画あたりの経済調査です。非常に多く数値が入ったもので、そういう面での関心なり能力がある方が読み込むとまたおもしろい読み方ができるかもしれませんが、『近代日本研究』でまとめたときには私自身の力量不足も

あって、そうした資料を使うことはいまだにできていません。ただソ連の5カ年計画についても、彼の場合は金融資本イコールユダヤの資本という、私からすれば非常に短絡的な受け止め方みたいなものがある、ちょっと分析自体に落差があるような気がその当時からしています。選科生として東大の経済学部で土方成美のゼミに入るんですけども、あまりその点で皇道派につながっていったらというか、具体的に言うと土方との関係については新庄のほうの断片的な史料を読む限り、あまりそういうものからの影響というのはないように思いました。

その頃から私の関心はいわゆる日米交渉の発端のことに向きまして、それと前後して、以前勤め先の大学の紀要に書いたり、『日本歴史』にもちょっとまとめたことがあって、今度は秋口にそういうものをまとめて本にもできるかなと思っていますが、三木清のことを平行して調べることがありました。私の母校であります上智大学にクラスというイエズス会の神父がいて、これが三木清などと研究会を作って、三木が留学から帰ってからのことですが、大変語学力があるということと、彼自身が左翼運動に絡まれ公職に就くことが難しくなったときに、このクラスが『カトリック大辞典』を編纂するというので、彼から財政的支援を受け、そのお手伝いをするわけです。これはだいたい戦争中なんですけれども、そのことに関心があって、聴き取りのことを平行してすすめたことがありました。そのグループには清水幾多郎とか古在由重とか、まだ助手だったんでしょうけれども丸山真男なんかもこのクラスからドイツ語を勉強することを兼ねて、その研究グループに入っていたようです。清水幾多郎には一度お会いしたことがあります。

協同主義思想との関わりでいうと、カトリック教会のほうで、社会問題についての教会の考え方というものが1931年に出るわけなんですけれども、その翻訳をこのクラスから三木清が依頼されます。三木清の名前は一切表には出てきませんが、いわゆるコルポラティズムの考え方というのがその中身になるわけですが、彼の協同主義の哲学の文章と彼が翻訳をしたものとの突き合わせると、非常に重なる部分があるというように、私の理解では、彼自身が協同主義を公にする際に、翻訳の仕事をしていたこととの関係で、かなりの部分、翻訳の過程で彼が得たものが反映したのではないかという受け止め方をしています。しかし、そのあたりのことはそれ以上には突っ込みませんで、三木清のいまだに定かでないところ、全集に断片的な日記程度のもので、これはもう公刊されてプリントになっているものがあるんですけども、当時は結構エネルギーがあったんだと思うんですけども、お嬢さんとかに手紙を書いて史料の所在を尋ねるといようなことをいろいろとやりましたが、ほとんど反応はなくて、それ以上調べ物は進みませんでした。

さきほどちょっと言いかけてましたように、日米交渉のことに関心をはらうようになりまして、ほとんどの方は日米交渉の発端となる、突然アメリカからドラウトという

メリノール会の修道士がやってくるというようなこと、そのあたりから話をはじめられるわけですが、私の関心は、なぜ来ることになったのか、どういうバックグラウンドがあったのかということで、東京にあるメリノール会の本部等々に尋ねたりしましたが、一切埒があきませんでした。それで、直接アメリカのメリノール会の本部、これはニューヨーク市から車で1時間ぐらいの所で、駅の名前もメリノールで、そこから修道会の名前もとられているんですけども、正式にはアメリカ・カトリック外国宣教会といって、メリノール・ファーザーズと言われているんですけども、そのアーカイブに行くことになります。コールマンという方がアーキビストで、その方と連絡をとって、74年か75年ぐらいだったと思います。伊藤先生がロサンゼルスに行っていて、そちらのほうに私はおじゃましたことがあるんですが、その1～2年前だったのではないかと思います。しかし、ちょうどその頃ワシントン大学の、今はもうリタイアされたのか知りませんが、手紙だけで連絡をとって面識はないんですけども、ビュートーという方がドラウトのことを追っておりまして、メリノール会にあるドラウト・ペーパーズは彼のほうが調べる……「プライオリティ・ライト」とかなんとか言っていましたけれども、「本にまとめるまでは1年間お前さんは我慢しろ」というようなことで、「はい、わかりました、我慢します」という他ありませんでした。

それで、たぶんビュートーが原稿を書いた時点で、ファーザー・コールマンから「見に来ていい」というようなことで出向きまして、修道院の1室をサービスで無料で提供してくれて、食事も修道院の食事でもいいならというので「結構です」というようなことで、ですから経済的には非常にそのときは助かりました。余談ですけども、アメリカ人ですので、私も修道院で1カ月も生活するとどうということになるのかと思ったんですけども、非常に陽気な連中ばかりで、堅苦しいこともなくて助かりました。閲覧室みたいな所はだいたいこれぐらいの部屋ですけども、朝から晩まで仕事をしたわけですが、ボックスでドラウト・ペーパーは50箱ぐらいございます。その内の約3分の1ぐらいが日米交渉に関するものです。あとの3分の1が中国での宣教活動に関係する宗教的なもので、あとの3分の1が、結局日米交渉が終わった後と言いましょうか、1942年に心臓発作で彼は亡くなるんですけども、その41年から42年の間あたりの史料です。彼の行動というのは、非常に政治的な色彩の強いもので、修道会のメンバー自身にも非常に批判的な人がいたし……、ですけども、ペーパーはきちんとアーキビストが保管するというようなことで、廃棄されたりはしておりませんで、これは系統的に史料が残っております。後々調査をしていって、突き合わせるということであれば、なかなかチャンスがなかったものでたぶん7～8年前だったと思いますが、アイオワ州のウエスト・ブランチという人口150人ぐらいの非常に小さい町なんですけれども、そこのモーテルに1カ月ぐらい滞在し、ハーバート・フ

フーバー大統領記念図書館で調査をしました。そのフーバーの秘書をしていたクーンレーブ商会という、ご存じでしょうが、日露戦争のときに日本に財政的な援助をするというような役割を果たした投資銀行ですけれども、そのルイス・ストロースという人がドラウトと組んで対日工作をやるわけですけれども、フーバー記念図書館の中に、ボックスにしてほしい 20 箱ぐらいストロースの文書があります。彼は原子力委員会の委員長でアイゼンハワー大統領の元で活躍をするわけですが（その前に彼は商務長官になるんですけれども上院から任命されませんで、商務長官は幻の任命に終わります）、その史料が大半です。ですけれども、日米交渉の史料と突き合わせると、ドラウトの史料の読み方もそれだけ傍証的なものになりますので、おさえていくおさえ方がバランスもとれていくというようなことです。

もうひとつは、これはドラウトの史料を見たあとぜひおさえておかなければいけないということで、郵政大臣をしていたフランク・ウォーカーの文書があるんですけれども、これはビューターも見たとはいえるんですけれども、断片的なものしか見ていなかったのではないかなと、後で彼がまとめた本を読むと思いました。というのは、私が出向いたのが 1970 年の後半だったと思うんですけれども、インディアナ州のサウスベントにあるノートルダム大学という、彼はそこの卒業生で理事をやっていた関係もあって、ドネイションというか寄付をしたんですけれども、これは 20 箱ぐらいございまして、これはもうほとんど日米交渉関係の史料です。要するにウォーカーはホワイトハウスに通じていたので、そちらのサイドの動きがよく見えてくるというようなことで、ぜひともその関係で日本の側の井川の文書をとるようになり、これはずいぶん前から新庄の文書を見た後あたりから、井川と新庄には直接の関係はないんですけれども、亀井さんやなんかの速記録を見ていて、井川のことはぜひ当たって直接その史料を見てみたいと。なんか家族関係がいろいろと複雑といえれば複雑なのですが、形の上では井川は財務官としてニューヨークに行っていたときにバイオリニストのアメリカ人と結婚をしますが、日本に帰ってきたあと離婚をいたします。そのあと井川愛子さんという浜松の人とご結婚をなさるのですが、そちらのほうと連絡を取りました。実際の文書というのは奥さんが保管しておりませんで、確か山井浩という方が保管をしていて、井川さんとは直接に血がつながった人ではありません。そういうことで当たっているときに、伊藤先生のほうもべつの鈴木明三という従兄弟のほうと接触をなさっていて、それで文書を介してドッキングというか、それが直接に伊藤先生とお仕事をさせていただくことのきっかけになったと思います。結構系統的な文書があって、これをコピーすることも許していただきまして、家へ持って帰りましてそれを全部コピーして、またお送りいたしましたけれども、残っているものについてはそのときに見ることができました。その間に平行して、澤田節蔵さんとか、寺崎太郎さんとかにお会いしました。ただ寺崎太郎さんという方は何というのかちょっと表現のしよ

うがないんですけれども、しゃべっていて外交官らしくないというか、ポンポン、ポンポン人の名前が出まして、話のほとんどが悪口というか、よく言えば批判みたいなものですけれども、「なっちょらへん」というもので、次から次へ外交官の名前が出てくるんですけれども……。べらんめえ調ですし、私は書き取っていたんですけれども、後で読んでもちょっとよくわからないというか。そのあと奥さんから、読売がシリーズでやっておりましたものに、実際はテープにして、いつか重点領域のときの科研費でテープの聴きおこしをやっていただいで、断片的に聞き取りにくい部分が多かったせいか、文字にはなっているんですけれども判読しがたい、意味がよくわからないというもので、話に聞きますとずいぶん長時間インタビューをやったようなんですけれども、あまりにもその内容自体がさっき言いましたようなこともあって、本のほうにはごく一部しか再録されていないような気がします。

憲政のほうの史料もということで、当時何回か国会図書館に通ったこともありましたけれども、日米交渉関係のものに直接かかわるような文書はありませんし、70年代の後半というのはまだ今の憲政が持っているような史料からすると、本当に限られた史料しかなかったような気がします。井川のごことは日米交渉との関係でこの井川のことを文書的に裏付けられればということだったんですけれども、調べていまして、むしろ彼自身の昭和研究会との関わりとか、国策研究会との関わり、結局大蔵省の中で彼はほだされておったとか、いろんな形ではしょられていくわけなんですけれども、実際のたとえば昭和研究会なんかでも、当初発足当時の彼の書記役とか会への参加の頻度からすると、関係者の回想録に出てくるものだけをただ鵜呑みにすると、ちょっと役割みたいなものから我々が引っ張りだすもの、なんか見過ごしてしまうものがたくさんあるのではないかというような気がずっとしておりました。そういうことが彼が戦後、協同党の書記長のようなものになるわけなんですけれども、協同党の関係の史料というか、そういうものを調べの対象にしようと……。ですから平行しながら次の段階では主にこれをというような、誰もがそういうことになるかと思うんですけれども、いちばん最初のアプローチは共栄火災の史料集めから当たっていかうということで、そちらのほうの社長さんとか、祖父江さんとか、いろんな方に協力を願ったんですけれども、ここひとつ史料的におもしろいものが出てこないというか、共栄火災は要するに社史のようなものを編纂するために必要な史料しか持ってありませんで、平行して水道橋にある「家の光」とか、そちらのほうにも史料がございましたけれども、限界があるというようなことです。

たまたま私は長崎に住んでおまして、その長崎に確か名前は小田太熊さんだったと思いますが、協同党の名簿を見ておりましたら協同党の旗揚げをやった方の名前があって、もし生きていたらというのでお手紙を書きましたら、ご存命でお会いすることができました。この方はごく一般的なパターンといえばパターンなんですけれども、ち

ようど大正末期に早稲田を卒業して、べつに西岡竹次郎なんかと直接に関係があったわけではないんですけれども、地元へ帰ってきて地元の新聞編集の仕事をして、戦後は中央で協同党の旗揚げがあったということで、自分自身が新聞記事を読んで共鳴して、おにぎり5～6個持って汽車に乗って東京へ行って、今の日大のあるところに本部があったんですけれども、そこを訪ねて行って、「長崎でも作るから」というような話をしてきた、というようなことをお会いしたときに言っていりました。その方は古沢磯次郎が編集長になる『協同民主主義』という雑誌、これを創刊号から7号ぐらいまでお持ちでした。これは『協同民主主義』『協同主義』『協同社会』とか名前が変わるんですけれども、昭和21年から27年ぐらいまで続いて、今は古沢さんの文書の中で憲政に入っていますけれども、全巻そろっていますけれども、最初の7号ぐらいをお持ちで、それをくださいました。それで読んでいたら、いろんな人が出てきますしおもしろいものだなということで、その協同主義のことに非常に関心が向くことになって、それではこの際、いろんな人に当たってみようということで、産青連や革農協の運動をやった方々に連絡をとって……。私は東京での井川忠雄のことで伊藤先生のお仕事のことはある程度は知っていたんですけれども、本格的にというか、情報自体が限られていて、木戸日記研究会とか内政史研究会でどれぐらい長い間いろんなインタビューとか史料集めをやっているというようなことを、身近にいなかったせいもあってフォローしていませんでしたので、豊福保次さんあたりのインタビューなんかも、あとでわかったんですけれども、ずいぶん以前になさったようでしたのに、そういうことを知るよしもなく、却って知らなかったことがよかったのかもしれない。もう済んでしまったみたいなことで……。この方はずいぶんと革農協と関係が深く、特に革農協のことについてはこの方が関係していた方々全部を2回ぐらいにわたって同窓会と称して集めてくれまして、新宿の喫茶店だったと思うんですけれども、春先と秋口に私が東京へ来れるときに皆に声をかけて集めてくださり、インタビューがそのときにできました。本格的にそのときにテープなどに録って、いろいろと聞くことができればよかったんですけれども、自分自身はそのときは最初から質問事項みたいなことを、あとで取りまとめるときに必要なものということで、おさえられるところはおさえる形でインタビューできました。また、豊福さんは自分でお持ちの史料を提供してくれました。中身はべつにこれというようなものではなかったんですけれども、とりあえず持っていては仕方がないということでくださいました。

安達巖さんも、これもインタビューをしていることを私は知りませんでした。むしろ前後して広瀬健一さん・・・この方は亡くなられたんですけれども・・・安達さんより先に会ったような気がします。広瀬さんのあと安達さんでした。伊藤先生がインタビューした以上のことを聞くこともなかったと思います。この方は本を書いておられまして、そのあたりのものを読んでおもしろかったような気がします。むしろ北海道の産

青連の中心的な役割を果たすわけですから、だいたい北海道と長野と島根、中心は長野と北海道ですが、北海道のほうに田村民安という人がいて、まだそのとき 80 年代のはじめだったのでご存命で、府中のアパートで生活していらしたと思いますが、いろいろと人生談義なんかも紆余曲折あったような話も聞きましたが、史料は残念ながらお持ちではありませんでした。それから平尾卯一郎さんといって、この方は産青連と革農協と、政治運動の産組の窓口みたいな役割を果たすんですけれども、あるいは生協運動をした山本秋さんとか、いろんな方にそのときにはお会いすることができたと思います。それから、助川啓四郎はこれをご遺族というかお嬢さんで、助川啓四郎が書いた本を 2 冊ぐらい、手に入らないものを「これが残っているすべての史料です」ということで、本を寄贈していただきました。来ていただいてもこれという史料はありませんというようなことで、時間もたぶんなかったんだと思いますけれども、直接乗り込んでいくというようなことはいたしませんでした。丁寧にやればみつかるかもしれない。助川の場合は、ご存じだと思いますけれども、戦時中の大日本翼賛政治家やなんかで、特に農村議員としてのまとめ役として非常に大きい役割を果たしたのではないかと思いますので、彼の動向などをきちんと位置づければ、戦時期の中谷さんが書いている中身をきちんとフォローできるのではないかと、そのときあたりからずっと思っておりますけれども、いまだにやってはおりません。

こういうことに関心を持つところに、さっき三木清の話をしたんですけれども、昭和研究会などに関心があって、酒井三郎さんなんかにお手紙を出すというようなことをやったわけですから、後で聞いて知ったんですが、伊藤先生が和田耕作とかいろんな方と親しい間柄だということは当時知りませんで、私自身の質問みたいなことに書簡で答えていただくというような……、後にちょっとご紹介願って、亡くなられる 1～2 年前に一度お会いしていろいろとお話をお伺いすることはできました。それと伊藤先生のご配慮で彼の日記のコピーなどを読むことができ、今度まとめた本の中で、高橋亀吉の文書を使って、革新の国策研究の高橋亀吉の動きを中心にまとめた中では、酒井三郎の日記を使わせてもらいました。ですからいまだに井川の革新派というか、革新派の動きの中での井川の役割というか、そういうものは史料的には私自身ちょっとおさえることはできませんで、実際にどういう関わりを昭和研究会なり国策研究会と関係を持っていたのかというのはいまだにはっきりしません。ですけれども、関心は今でもございます。むしろ日米交渉なんかよりは、むしろ昭和研究会や国策研究会での役割ですね。

それと、こういう日米交渉や産青連や革農協のことに関心を持つと同時に、外務省のほうの革新派の動きというものを……、直接のきっかけは新庄健吉文書なんかを読んでいて、それは断片的なものですけれども、武藤なんかが主催して新官僚とかと会合があってどうのこうのというような断片的なものが出てくるんですね。皇道派の動

きに対して警戒をどうの……というようなことですね。その関係で、たぶん具体的には何だったのかわからないのですが、外務省の革新派の連中というのはだいたいほとんどと言っていいと思うんですけれども、海軍と陸軍のそれぞれ皇道派につながる連中との間にパイプがあったと、艦隊派や皇道派との……。そういうことで調べていて、僚友会というグループが外務省にあったということは知っていたんですけれども、その一員で川村茂久という人がいて、奥さんが三井商船のお嬢さんで、入り婿として大変な金が入ってきたということがあって、彼はふんだんに金を使って右翼関係の人たちと気脈を通じます。実際に外務省の革新派のイデオログになるような役割を果たしたわけではないのですが、そういうスポンサー役みたいなことになったために、かなりの部分が彼の活動自体を追っていくことで、外務省の革新派の動きがチェックできることになります。たまたま奥さんがご存命で連絡をとっているうちに、史料があるのでお見せしますということで、出向きましたら日記がありまして、昭和6年ぐらいから昭和18年、19年、20年まで、中ちょっと削れている部分もあるんですけれども。それを読むことを許されて、コピーをとることも許されて、断片的には『中央公論』の日記の紹介のところで活字にもしましたけれども、非常に具体的に僚友会を中心とした外務省の革新派の動きが、口では言われていたけれども具体的な形ではおそらくこの川村茂久の文書で、はっきりしたことになるのではないかと思います。その関係で高瀬侍郎さんとか、加藤シヅエの弟さんになるんですけれども広田洋二さんとか、河相達夫・・彼の場合はご息子とお会いすることで、革新派の動きみたいなものを、少なくとも太平洋戦争までのことはだいたいおさえることが、この川村の史料を使ってできました。

私の関心は大戦中はどうだったのかということと、特に重点領域の伊藤班に入らせていただいて、そのときにひとつやりたかったのは、18年、19年、20年そして21年ぐらいあたりの外務省革新派のその後というか、私に言わせればそのあたりのことをやれたらと。特に平沢和重と福島慎太郎と……。福島慎太郎は談話速記録があるんですけれども、どうも川村茂久の文書に当たると、福島慎太郎の談話速記録でかなりの部分は語られてはいるんですけども、まだまだちょっとしゃべっていない部分があることと、特に18年、19年、20年ぐらいの間のこと、それと大東亜省に19年に移ることになる平沢和重あたり……。平沢は結局8月15日の後、その前に過激すぎるということでクビになり、そのあと戦後三木の片腕になります松本滝蔵という、この人にも僕はものすごく興味、関心があって、これは今でも非常に関心があります。時間をかけているかけ方からいうといちばん長いかもしれません。ずうっと前から何か史料があればということで、GHQとの間で非常に……。明治からハーバート大学に行って帰ってきて明治の先生になって、その明治ということで三木武夫と戦後関係があるんですけれども。戦後のいわゆるアメリカとの関係でいうと、占領期の裏かもしれませ

んけれども、彼の史料なんかが見つかる就非常におもしろいことがわかってくるのではないかと思いますけれども、限界があっただけに……。だいたい『文春』でよくドキュメントを書いている佐野真さんという人がいるんですけども、あの方が正力松太郎のことをやっているときに、私のところにある日突然電話連絡があって、「松本滝蔵のことを調べていますね」と言われて、どこからどういう話になったのか知りませんが、「ええ、関心はありますよ」と。「何かわかりましたか」と言うから、「残念ながらわかっておりません」というようなことで、どうもその方が調べていたのは、正力松太郎がGHQと関係を取り結ぶときに、その松本滝蔵を間に介してということだったので、ぜひおさえなければということだったみたいです。しかし結局やっていくうちに、生まれ自体も広島で生まれたとことは確かなことではあるが、出生が表に出にくい部分があって、連絡を取るその筋が途切れてしまう。あとで重点領域をやっているときに、三木武夫の文書に当たりたいというので睦子夫人にもお会いしたことがあったんですが、「滝蔵さんのことはよく知っているけれども、史料的にはどうも情報提供は難しいのではないかと」いうことでした。三木武夫の場合も、私もそうですし他の人が誰か見つけたという話は聞いていないので、彼の場合は史料的にはちょっとおさえることが難しいと思います。事務所とか、渋谷のほうのご自宅にも残っていないような気がいたします。それとの関係では、二階堂さんにはいろいろと回想録があります。一度お手紙を書いて接触をしようとしたんですけども、当時はまだ現役だったこともあって、協同党関係のことでいえばおさえることはできませんでした。井出一太郎さんとも連絡をとったんですけども、もうそのころはずいぶんと弱られていたころなので……。

あと長野関係でかなり連絡をとって、出かけようとしていたんですけども、なにかそのころいろいろと違う用事があったこともあり、長野には結局いまだに出かけて行っておりませんが、もっぱら手紙などで連絡をとるぐらいしかやっております。そのあと、伊藤先生が間に入っていたと思いますが、原朗さんや中村隆英先生が中心になって、国策研究会にあった美濃部洋次の文書、東大の経済学部にあるんですかね、図書館ですか、それを見る機会があって、たしか1週間ぐらいこもって、ちょうど整理が終わったときぐらいでした。いろいろと関心があるようなことが出てまいりまして、しかし美濃部とかの史料は、伊藤先生がまとめられているようなことですので、私のほうでどうということはないんですけども、大変に参考になりました。

それからあとは、後タイギリスとかアメリカに出かけて行くきっかけになったというわけですが、東大のアメリカ研究資料センターにあるIPR文書で、これは高木八尺先生のもんですが、私はざっとは見ましたけれども、結構なボックスの数なんですけれども、ちょっと関心の対象からいうと、それほどおもしろいものではなく、そこに

執着することはありませんでした。日本で I P R 関係のことをやっている方は、この東大とか一橋に油井さんが以前集めたものを見るわけで、これはたぶん大窪さんという亡くなられた日本における I P R の事務局をやっていた方の影響なんですけれども……。

伊藤 大窪愿二さんでしょ。

塩崎 そうですね。I P R に関係した方は、私の印象では、やはり少しアメリカの中でマッカーシズムの標的になるわけですけれども、復権をかねて、左翼というんでしょうか、非常に政治的な観点からのおさえ方みたいなものが一般的なようで、私はあまりそういうことにおさえ方としては関心がないので、そのことが直接チャタムハウスに出かけて行くとか、あるいは自分なりに跡付けられたのではないかと思うんですが、I P R のようなものをもう少し史料をちゃんとおさえていくと、単にハワイの Y M C A の連中から始まったというだけではないバックグラウンドがあるのではないかというようなこと……、それは最近ちょっとまとめることができたんですけれども……。

ところで先程触れた『協同民主主義』という雑誌を見ることから、古沢磯次郎に非常に興味を持って、このあたりの文書をなんとか見たいということで接触をしておりましたら、これが以前に伊藤先生や有馬さんもずいぶん昔に接触があったという話を後に聞きました。結局見せていただくことになりまして、その後憲政のほうに入ることになりました。それと、重点領域のときには旅費やなんかもありましたので、北海道のほうに3度ぐらい行くことになりまして、黒沢西蔵の、これは以前から手紙と電話で接触をしていたんですけれども、直接出向くことになりました。これは箱にすると50箱ぐらいあるんですけれども、ご息子が酪農学園大学の理事長をしていらっやって、実際にチェックいたしましたら、私の関心があるものは1箱ぐらいで、あとはほとんど協同主義思想運動に直接かかわるようなものではなくて、雪印関係のものとか、北海道の開発の資料でした。ただ、田中正造の全集に入っていますけれども、いわゆる田中との関係で弟子入りをして、足尾のときなど10何才ぐらいだったらしいですけれども、黒沢が田中と手紙を交換するわけですが、その現物もございました。それから日記があるとほのめかされたんですけれども、これは今の段階では公にはできないと言うことで、どこまで本当なのか……。おもしろいものなのかというのはいまだにどうも……。もうこれで4年ぐらいたつんですけれども、なにかチャンスがあればというので今も欠かさず年賀状は書いているんですが、ご存命のうちに接触ができればと……。

それといちばん期待したのは、北政清と北勝太郎、北兄弟という北海道の産組運動の中心人物で、戦後の協同党の動きの中で結構暴れまわったといわれる人物です。それで、流れとしては旭川周辺の産組人脈に近いほうなんですけれども、後々の民社の

……小平忠とか、そっちのほうに流れていくような政治風土がある地域の代表で、屋根の裏の部屋にあるとかいろいろ言うんですけども、一緒に屋根の上に上がったりとか、倉庫にあると言うので、周り一面雪が積もっていたんですけどもかき分けて、納屋みたいなどころへ行って……、でも残念ながらありませんでした。しかしおもしろかったです。それから、左翼運動をやっている昭和研究会に拾われるというか、大山岩雄という人で、ご子息はいま慶応の経済の先生をしていますけれども、この方の文書がありまして、これは袋にして3袋ぐらいあって、メモと彼が酒井三郎さんと一緒に事務局を代表していろいろと研究会の集まりがあったものの記録とか……。それからあとは戦後自民党というか、自由党のイデオログと称して、いろいろと広報誌なんかの編集長もやったりするんですけども、彼の場合は戦争を契機にして他の革新派の連中とは違ってまるっきり自由主義というか、彼の言葉を借りればということですが、そういう立場を非常に鮮明にします。早い段階から自主防衛のような……、その関係の記録もあるんです。ですけども、私自身が興味があるのは昭和研究会に関係するころの史料なんですけれども、それは非常に断片的なような気がします。

伊藤 それはどこにあるんですか。

塩崎 長男の方、慶応の先生です。それはコピーさせていただきました。

伊藤 個人の所蔵なんですね。

塩崎 個人の所蔵です。非常に断片的なものです。ですけども、とりあえず今まで大山の場合は追想録と翻訳・レーニンでしたか、それぐらいで、あとは警察のほうの左翼運動に関係した調書みたいものですけども、実際の彼の生の声。特に統制経済について戦後彼は大変反発するわけですけども、18年というか、要するに15年に昭和研究会というのが店じまいしたあと、彼は産組のほうに関係して、そちらのほうの事務局に入るんです。そのときの、便箋で分量にして50枚ぐらいの、統制経済についてという討議録があります。全部で出席者が5人でA B C Dという記号で人物は特定できないんです。討議している内容はおもしろいんですけども、特定できればますますおもしろくなるのではないかなと思うんですけども、いまだに特定できません。それと、橋本登美三郎にも連絡をとりましたが、これという収穫はありませんでした。あとは平行して、戦後、これはいずれ本になるのでしょうか、高木惣吉文書なんかが出てくればよりはっきりするんでしょうけれども。前々から矢部貞治日記は私自身いつも追っていて、調べるんですが。伊藤（光一）さんのお世話で戦後なんかもちゃんとフォローできればというので前々から……。何回か東京のほうに通って、伊藤さんとも度々矢部貞治文書については、いくつか出していただいて見たんですけども……。

伊藤 光一 だいたいこちらにみんな入る予定なんです。

塩崎 それで、あとは重点領域のときの科研費をお使いくださって、高橋亀吉文書の

写しをずいぶんとっていただいて、それを去年と今年のはじめぐらいかかってずっと読み込んで本にして、いずれできあがりましたら読んでいただければと思います。高橋亀吉を整理していておもしろかったのは、やはり第1次世界大戦から第2次世界大戦の両大戦を挟んで、彼の変わらない一貫した統制経済というか、経済の統制、その位置づけみたいなもの、それと昭和研究会自体のかかわりで高橋亀吉の……、指摘した人ももちろんいるわけですが、彼自身の役割みたいなものがその高橋亀吉の文書を読む限り、言われているよりももうちょっとウエイトが高いような気がするのです。特に昭和11年の時点で、伊藤先生が指摘なさっているわけですが、昭和研究会という名称自体、これをきちんとおさえていくということの絡みでいうと、要するに高橋亀吉の文書の中に『昭和経済国策綱領』というのがあるんです。これは蠟山政道がたたき台を書くという形で、彼が昭和9年に近衛の通訳を兼ねて出かけて行くことで、けっきょく『昭和国策綱領』というものができあがらなかったということになるわけですが、高橋亀吉の文書の中に『昭和経済国策綱領』というのがあるんですが、これはおそらく『昭和国策綱領』を前提に高橋が書いたものだと。その中に今度は蠟山の批判というか、3点にわたる批判のようなものが入っております。しかし、経済に傾きすぎているとか……。そういう高橋のイニシアティブみたいなものからいうと、必ずしも蠟山がブレーンの中心ではなくて、高橋のウエイトが非常に高く10年とか11年、11年あたりがピークだったのではないかと思います。結局、事実上この文書に当たる限り、昭和研究会はこの高橋亀吉経済研究所が肩代わりすると、これを改称して昭和研究会の事務局になると。それともうひとつは蠟山のほうの東京経済研究所ですね。どうも昭和研究会の出自には蠟山と高橋、このふたりの人間が、谷町は別にいたとして、主役となり、そのふたりの活動のベースになったのが、いま言った東京経済研究所と高橋亀吉経済研究所です。ところが高橋は結局12年あたりから大山とか酒井三郎あたりから追い出されていくということでしょうかね、中国政策を巡って……。

伊藤 確かにそういう筋書きですね。

塩崎 それと膨大なものではあるんですが、結局18年、19年に、賀屋と話し合っって、戦後構想を高橋亀吉がたてるんです。高橋の戦後構想というのは、統制経済は絶対にやめてはいけないと、戦後もしばらくやっていかなければいかんと、それで日本の復興が成り立つのだというようなことです。これで両大戦間をくくると、10年代、40年代までの日本における革新運動思想のひとつの長いスパンでの動きみたいなものを整理できるのではないかと思います。国内編ということでとりあえず……。

伊藤 少し質問ということですのですめましょう。僕も川村茂久のをなんとか本にしたいなと思っているのですが、なかなかスポンサーが見つからないんです。僕のメモにはきちんとそのことは書いてあるんですが、どうもうまく見つからないですね。あなた

が持っていらっしゃると言ったのは何でしたか。研究室に置いてあるというのは。

塩崎 残っているのは、新庄のがあります。

伊藤 これはどうですかね。目録をお作りになりましたか。

塩崎 いえ、作っていません。あまり系統的なものではないので。

伊藤 だいたい今のお話を伺って、僕と同じようなことをいろいろ考えて……、あなたは言葉ができるから外国編があるというのが違うなと思ったんですが。戦後のことで、澤田節蔵さんの話がちょっと出ましたけれども、これは何かありましたか。

塩崎 ありません。ありませんというか2度ぐらいお会いしたんですが、お話を聞くだけのことでした。

伊藤 僕はいまちょっと……、たぶん澤田節蔵さんのほうだと思ったんだけど、廉三さんかな……。世界経済調査会の問題をちょっと調べたいと思っていて、というのは、尚友倶楽部で渡辺武さんの話をちょっと伺っていたら、渡辺武さんは世界経済調査会の話をしまして、それで、彼の渡辺武日記を見ていますと、ドゥーマンとのかかわり合いが出てくるんですね。このドゥーマンとパケナムですね、あのグループが……その後ろに大使だったグルー、それからキャッスルとか、こういう人たちがいる。それで占領軍の批判をやって、どうもその世界経済調査会を日本における連絡場所にすることを考えていたらしいので、K・スガワラという人物がいるんですが、これの伝記があるらしいんだけど、僕一所懸命探しているんだけど、持っていますか。

塩崎 持っています。

伊藤 おおっ。貸してください。

塩崎 結構新しいですよ。買ったのは2～3年前です。文藝春秋ではないですかね。

伊藤 それだったらすぐ手に入りますね。それはK・スガワラというのは渡辺武日記にしょっちゅう出てくるんですよ。いろいろ日本の中で活躍をされていて、今のGHQのやり方だと日本は共産圏に飲み込まれると、それでは困るという、そういう動きをいろいろやっていたと。戦後のアメリカの政策転換とその転換に遅れているGHQ関係を少しきちんとおさえていきたいなと思っているものですから。ダレスなんか日本に来るといっても、そういう連中がかんでいるというような話を聞いたものです。本当かどうかわかりませんがね。

塩崎 そのかかわりで言えば、季武さんと一緒に出向いた、この前先生にお送りしたまとめた本の中にも書いたんですが、コール・グローブという人がいるんです、ノース・ウエスタン大学の。コール・グローブのペーパーというのは全部で10箱か15箱あるんですけれども、そのうちの3箱ぐらいが関係資料で、憲法制定にかかわる顧問としてGHQに派遣されるんですけど、彼は要するにIPRに関係していたわけですけども、IPRの左傾化に対して反発をして、それでキャッスルとか、キャッスル

あたりをIPRの会長にしようと思おうような動きが片一方にはあるんですが、いちばんの頭、グループの頭目となるのがグルーですよ。

伊藤 K・スガワラによると、ドゥーマンはOSSの関係者のようですね。OSSのほうもちょっと見たいなと思っけていますけれども……、前にアメリカに行ったときに、OSSの文書が近々解禁になるとかいうそんな段階でしたのでね。

塩崎 OSSの文書は私もちょっと見たんですけども、膨大ですよ。今は検索の方法がたぶん変わっていると思うんですけども、私が見たときは、書庫に入って……ちょっとルーズなんですけど……、あそこには日本人が行くと誰もがお世話になるテイラーさんという人がいて、私が行ったのはもう10何年も前で、まだナショナル・アーカイブズに行く人がそれほどたぶん多くなかったんだと思いますね。だから、中まで直接……、今考えれば貴重だと思ったんですけども、「入っていいよ」とか言って、自分で中の保管しているものを見ることができたんですよ（笑）。そのときは国務省の日米交渉絡みで、本当にハルがどこまでやる気があったんだとか、そういうことを何とかして見たい、探したいと思っけていたから。テイラーさんというアーキビストが、「日米のものだったらOSS史料もおもしろいがあるよ」と。こういう引き出しみたいなのにカードになったようなものが、チョコチョコと項目はあるんですが、それがどのくらいありましたかね、膨大な量で。だってあれはヨーロッパ……、いたるところにあるじゃないですか、戦略局というのはね。だからアジアはアジアで、また日本はということで、年代別にたぶん今は区別されているから引きやすいでしょうけどね。

伊藤 今度機会があったら行ってみたいと思っけていますね。戦後の日米関係もGHQとの関係だけではなくて、いろいろね。もちろんGHQは非常に嫌がったわけですけども、いろんなルートがあったことはまちがいないので。Y項パーギーというふうに言われるでしょ。杉原荒太もそれをやられたと言っけていますが、杉原について今まで何かぶつかったことはありますか。

塩崎 ものすごく関心があっけて、矢部貞治文書の中にちょこっとなあるんですよ。

伊藤 結構出てきますよ。あれは外務省の革新派のグループの中には名前は出てこないですか。

塩崎 出てこないですね。きちんとおさえていませんけれども、むしろ距離があるようですよ。というか、違うグループというか……。

伊藤 というのは、彼が大東亜省の時代に、日中ソ同盟みたいなことを書いているわけで、そのときにソ連に対して非常に融和的な態度をとっているんですよ。それが戦後日ソ交渉の先駆になるわけでしょ。そのへんがどういう関わりになっているのかなと思っけてね。それで、だいたい何で鳩山がもともとと言っけばそういう反ソ論で、例の吉田の上奏文みたいなああいう考え方をしていた人物が、急に日ソ交渉に命をかける

ようになるのか。そこは確かに杉原の影響が非常に大きいんですよね。だから杉原という人物をもうちょっと知りたいなと思ったんですけども。もしかしたらその革新派の仲間かなと思ったんですけども、そうじゃないですね。

塩崎 川村日記なんかには全然出てこないですね、杉原という名前は。

伊藤 平沢和重なんていう人は、僕らは戦後NHKの解説で見えて、とてもじゃないけどそんなこと夢にも思わなかったですが。

塩崎 これは、奥さんに嫌がられながら2度お会いしていただいて、どうも日記じゃなくて何かあるみたいなんですよ。「お見せできません」と。しかし、何かの機会にお見せ願えるかも知れません。何かあるみたいですよ。

伊藤 もうひとつ、蠟山さんの話が出ましたので一応お話しておきますと、蠟山文書はミニチェロさんは返したんです、蠟山道雄さんに。僕は蠟山道雄さんに手紙を出したんですけども、なしのつぶてなんで、もう一度ちゃんとやってみなければと思っていましたが。これは大事な史料がたくさん入っています。彼女が借りてハワイ大学へ持っていったところに、僕はむこうでざっと見ました。

塩崎 ミニチェロさんは本に書いたでしょ。

伊藤 本になりましたか。本にはなっていないと思いますけれども。

塩崎 あれは内容は違いましたかね。

伊藤 蠟山のことは何か書いたと思いますけれども、本にはなっていないと思います。

塩崎 だいたい網羅しているんですか、昭和研究会なんかを含めて。

伊藤 というか、むしろ満州建国から新中国の建設……、要するに国家を作るプランナーとして活躍した、そういう関係の書類が多いように思いますね。ですから、酒井三郎が昭和13年に上海会議のことを書いたでしょ。あれの詳細な記録があるんです。

塩崎 箱にしてどれぐらいあるんですか。

伊藤 ロッカーひとつありましたからね。ファイリング・キャビネット。ミニチェロさんに言わせると、それは自分は選んで借りていったと言うんですけども、ではその選ばれて残ったほうはどうなったかということを知りたいと聞いたら、「いや、うちには何もない」と。第一ミニチェロさんが借りていったことも知らないというようなことを言っていたから。或いは裏の物置にでも入っているかもしれないとかいう話で、なかなかあの人も動いてくれない人だから。とにかくやりたいと思っているんですけども、時間がなくてできないんですよ。そういう情報があって、動けばなんとかなるかもしれないけれども、今のところなんともしようがないというのはたくさん懸案として抱えているんです。懸案として抱えていると、なにか開花することも時々ありますけれどね。

有馬 広瀬健一のところは何かあったんですか。

塩崎 いや。飲みながら話をするという……。話はおもしろかったですけれども。

有馬 僕は行く前に亡くなっちゃったんです。洗足かどこかでしたよね、確かね。

伊藤 あの息子が亀井さんの秘書をやっていたんですね。その秘書の人にはずいぶん会っていたんですけれども。この間亀井貫一郎の伝記を作るとかという集まりがありまして、僕もちょっと呼ばれて行って史料を……という話をいろいろやったんですけれども、皆さん誰もおっしゃるんですが、要するにインタビューで聞いたことを裏付けるような史料は何もないと。インタビューはどこまでがホラで、全く根拠のないことなのか、多少なりとも何かあるのか、そのへんも見当がつかない。高橋正則さんだったかな、その方がかなり中心になっているようでしたけれども。それと、福岡の網本義弘氏、あの人は昔からなんか知っている人なんだけれども、亀井さんのところで会って、それ以後付き合っているんだけど、デザインかなんかのことをやっている人なんだけれども、どこかの大学の先生で、どこの大学だったか……。今度調べてあなたに紹介しますから、一度会ってみてください。おもしろい人ですよ。この前とてつもなくおもしろい本を書いて、僕はちょっとおもしろかったんですけれども……。なんていうのか、それはデザインの話ではないですよ、その本は。発想の転換みたいな本なんですよ。それを僕は読んで非常におもしろかったんで、彼と付き合っているんですけれども。亀井さんのは、ソ連の連中との付き合いの話も出てくるんですけれども、おそらくこんなのは、僕は新庄あたりから聞いた話を自分で創作したんじゃないかなと思っているんですけれども、よくわからないですね。

塩崎 そうですね。直接関係ないですけれども、僕は信じたというか……。たとえば日米交渉なんかでも自分が井川を派遣したみたいな、『ゴム風船』の何かですが、そういうのは史料できちんと押さえるから、これはまあ……。 (笑) 、思い込みですね。ただ、あれを最初読んだときに、発想の転換ではないですが、歴史小説と言ったらいいか、たとえば、ヘスが5月にイギリスに飛びますね。そのあと独ソ戦になるでしょ。それとの関係で、いつごろだったか忘れましたがドイツに行ったときに、コブレンツという所に連邦公文書館というのがあるんです。そこにヘスの文書があるというので、亀井さんの言うことを信じて行ったんじゃないんですけれども (笑) 、ヘス自体のああいいう英独宥和政策の、それはそれなりに興味があったから、今でもあるんですけれども、だから史料は手に入る限り集めているんですけれども、とりあえずコピーみたいなものはとってきたんです。その中に本になっているもの以上の珍しいものが文書の中にあっただけではないんですけれどもね。でもやっぱりヘスがあの時点で……。だからあれはたぶん回想というより自分自身がドイツの……。誰ですかね、満州時代から自分の片腕になってというか、亀井さんが言っている人がいますよね、ベルトラム、成城の田島信雄さんなんか調べて……。満州国を巡る日独関係なんかのところに出てきますけれども。要するにリップントロップとヘスという、つまりドイ

ツの対外政策の中での対立路線ですよ、確かにそういう対立があって、ヘス自体の動きというのは、イギリスとあの時点で手を結んでソ連共産主義勢力をやっつけるみたいな、そういう動きみたいなもので、その次の独ソ戦とか、当たり前ですけど、国際情勢の動きの中で日米間の問題なんかも当然動いたわけですから。だから亀井さんは物語ですかね、やっぱり、そのあたりのこと…。あとで考えていてヘスなんかの話を出してきて……。

伊藤 天皇制の問題を巡ってソ連のクーシネンとかいろんな連中と話し合いをしたとかね。これは……、なんという話だろう、こんな裏を取れるわけではないなと思っているんですがね。

塩崎 でもクーシネンの奥さんはゾルゲのことでフォローして来ていたんでしょ。

伊藤 そうですか。

塩崎 だったと思いますけれどもね。それは事実関係で、なにかソ連の外交文書かなんかが公になるじゃないですか。確かその中に一橋の加藤節郎さんの調べている中に、出てきますね。ミセス・クーシネンの伝記があるんですが、その中に、変名して日本に3年間ぐらいいたと……。

伊藤 じゃあ、創作の元はあるのかな、やっぱり。

塩崎 事実関係はべつにして、なにか発想の中に……。

伊藤 まるっきり空のことを考えるということはちょっと無理だと思うから、何を膨らませたのかなと、ゴム風船にね。

塩崎 でもあの類の話に住友商事というか、伊藤忠商事の幹部にしゃべるわけでしょう（笑）。長く送って来ていましたものね。ずうっと。

伊藤 ブリーフというやつですね。

塩崎 亡くなる直前ぐらいいまで。

伊藤 結局あれは息子さんと連絡をとって、残っている史料を全部憲政に入れてもらったんです。そのときに僕は見ていない史料はあるかなと思ったんですけど、なかったですね。ましてやそのナチスとかソ連とかに係わるようなものは全くありませんでした。

塩崎 ただ昭和11年ころに、亀井貫一郎さんと高橋亀吉の弟子筋にあたる郷司浩平という、郷司浩平もおもしろいんじゃないですかね。

伊藤 彼は中村隆英さんたちと一緒に『昭和史を作る人びと』という、あのときにインタビューの相手として、僕はぜひ郷司浩平をやってくれと言って、それでその郷司浩平に亀井さんと一緒にドイツに行ったときの話を質問したんですけど、彼は言いたくないんですよ。どうしても逃げるんです。

塩崎 逃げるんですか。

伊藤 逃げるんです。亀井さんのことを話したがるじゃないんです。ちょっと何かある

んだなと思って……。しかしあれも史料集めはやる必要がありますね。

塩崎 特に戦後の生産性本部のことですね。それと経済同友会。

伊藤 またね、団体の人というのはいろんなことをやっているわけで、だから、酒井三郎さんにしたって民放連の常務理事かなんかになるでしょ。そういう形でいろいろ団体の仕事をやっている人は多いですからね。案外馬鹿にならずきちんと集めないといけないですね。どうも少し最近、佐藤栄作日記に足を取られてとか、手を取られてとか、動けなくなっちゃったんです。それと、政策でやっているオーラル・ヒストリーにも巻き込まれて、これがどんどん広がって身動きがならないという。あちこちでそういう史料をせっせと集めて、自分の研究と合わせてどんどん収集して保存まで……。もちろんこっちもバックアップしますけれども、保存のことも考えてくださるとい方が増えていかないとどうにもならないです。

塩崎さんにはまだこの研究会のことを話していませんよね。要するに、来て話せということだけ言ったんですよね。前から日本近代の史料館をきちっとしたものを作りたいということを考えていて、しかし史料はもうかなりいろんなところに入っていますから、だからネットワークでやるということを考えていて、それで去年科研費の申請をしたんです。いろいろ文部省の人とも相談をして、歴史の部門で出すとこれはやられるから、一般の審査のところに出そうということを出したら、うまく通ったんです。それでまず史料の所在と史料を持っているところが、どんな目録を出しているかという調査を今やっているわけです。目録は相当集まりました。一方でその目録を集めるのと、それからホームページをたてて、我々のわかっている限りで所在、何文書がどこにあるかということの情報提供は始めたんです。本当はそれをクリックすると、その史料の概要と所蔵場所と目次が出てくるという仕掛けにいちおう形はなっているんですけども、目次を入れるというのは、これは目次そのものは著作権があるのかどうかという、ちょっとやっかいな問題があるので、それは実は内部資料として作っておこうということで、今作成にかかって、今年はそれをかなり重点的にやろうということにしているわけです。その秘密結社のメンバーにあなたを入れようと、それで一度話をしてもらおうと、こういう魂胆なんです。あなたはパソコンをやりませんか。

塩崎 全然やりません。

伊藤 やってください（笑）。インターネットだけできればいいんですから。二層構造になっていまして、一般に出しているところと、内部情報と、二重構造になっていまして、メンバーズというので入口が別になっているわけです。そのメンバーに入れようと、こういうことなんです。大学にあるでしょ。

塩崎 あります。でも私自身はいまだに鉛筆で……。

伊藤 インターネットはべつにどうということはないので、開けてみるぶんにはどう

ということはないんです。だから、大学の誰かに手伝ってもらってもいいんですよ。アドレスをお教えしますから、それにインターネットでアクセスして見れば、だいたいどんなものかというのがわかりますから。

塩崎 わかりました。余祿に預かるぐらいは……。

季武 塩崎さんは海外の細かい余り知られていない所蔵機関の史料もご存じなわけですね。それをどうやって調べるのかという、その方法をお聞きしたいんですけども。

塩崎 季武さんも一緒に1カ月ぐらいご一緒しましたよね。私の場合はきょうもしゃべったんですが、調べ物をやっていて、人というか、この人間のこととはなんとしてもおさえなきやいかんという、たぶんその人物の紳士録などで住所を引っ張ったりして……。

季武 海外もですか。

塩崎 はい。

伊藤 『WHO'S WHO』から見るんですか。

塩崎 そうですね。

伊藤 死んだ人はどうするんですか。

塩崎 死んだ人の場合は、リファレンス関係の文献でアーカイブのリストがあるんですね。どこにどういう文書が入っているかと。

伊藤 それはどういうものですか。冊子になったものですか。

塩崎 私が使うのはプリントされたものです。

季武 アメリカとヨーロッパ、各国で作っている？

伊藤 それはたぶんインターネットでアクセスできるんじゃないかな。

塩崎 それと、たとえばワイズマンみたいな、口はばった言い方だけれども、向こうの連中なんかも当たっていなかったもの、そういうのはさっき言ったように遺族とか……。それから間接の間接ですが、結局ドラウトと関係があったというからメリノールのアーカイブのアーキビストに……。日本はどうか知りませんが向こうのアーキビストというのはそういう点での知識というのは、それが教えてくれるというか、それはそこにありますよ、という形で広がると言えば広がるんです。それで相手側に手紙を書いて「調べに行きたいんだ」と言うと、少なくとも欧米などは非常に丁寧に返事をくれます。目的さえはっきりすれば次から次へ出してくれます。

伊藤 あれはプリンストンに行ったときか、ナショナル・アーカイブズに行ったときだったか忘れましたが、とにかく「こういうことで研究に来た」と言ったら、「この目録で、だいたいこのあたりを見ればよろしい」と。「面倒だから全部持っていきます」と言って、運んでくる車で3つぐらい持ってきて、それに箱がいっぱい乗っていて、これはとてもじゃない、何日かかっても見られないなと思って読んでいたんだけ

れども。それは本当によくできていますね。日本もそういうふうになればいけないと思いますし、そのために何かできるんじゃないかなと、今ちょっと思っているんですよ。

季武 そのアーカイブのリストみたいなものですよ、それがまずないですよ。

伊藤 ないことはないんですけども……。そのきちんとしたものはどうやって手に入れればいいのか教えてください。

塩崎 それは国会図書館のリファレンス・ルームの……。

伊藤 そうですか。

塩崎 でも具体的に言えば、半分ぐらいは間接の間接で、調べ物をはじめたら熱になされたみたいになりますから、だから藁をも掴む思いで書いて、情報集めをして、みたいなことですかね。

伊藤 それ以外にないですね。どうしても欲しくなるということですね。

塩崎 どうしても欲しくなる。これは史料ではないですけども、フィリップ・カーことロード・ロシアンというイギリスの駐米大使をやっていた人ですが、これが伝記があるんですが、その伝記が1950何年に発行されて、国会にもないわけですけども、何がなんでも手に入れたいと。外へ出たときには必ず古本屋を含めて本屋をあさって、結局6年ごしかなんかに、たまたまハーバート・フーバーのさっき言ったウエスト・ブランチの図書館の……、あるじゃないですか、アーカイブに参考のための本……、そこにあつたんです。僕もカネとヒマがないから短期間で勝負しなければならないので、ひとつは頼んでくるという手があるんですけども、結局、文書館のものというのはいちいちチェックをして、その点では国会とも変わらないのですが、いちいち一枚ずつ請求しなければならないんです。ものすごく時間があるんです。ところがハーバート・フーバー図書館の場合は、ボックスで出してくれて、チェックしたら、自分自身でコピーできるんです。

伊藤 原文書がですか。

塩崎 はい。だから、そこは3週間ぐらいいましたが、朝の8時から、アーカイブの場合は5時に終わりますが、昼飯を30分ぐらいでもう次から次へ……。結局著作権なんか関係なく、その本も全部コピーしました（笑）。やっとなが物になったという……。むこうの人も時々来るけれども、べつに……。管理がおおらかというか、そういう対応をしてくれると、短い期間で調べ物をする側としては助かりますね。日本なんかではとてもじゃないけれどもあんなことは。

伊藤 日本にはアーキビストがいないんですよ。それをこれからどういうふうにしていったらいいのかというのは、これは本当に国家的な課題なんです。

塩崎 憲政にいる方は？

伊藤 憲政はどんどん、どんどん……。

塩崎 アーキビストといわれるような方はいないんですか。

伊藤 全然。図書館委員ということですよ、あれは。アーキビストになりかかったらすぐ追い出しだものね。

塩崎 そうですね。アーキビストはそれなりに誇りを持っているし、社会的な評価も高いですね。

伊藤 大学の先生と同じですね。他に質問はありませんか。僕もやりかけの仕事でファイルになっているものがあるんですけども、全然一步も進まないで今は別なことに追われて、そろそろそれがひとつの仕事が終わってやろうかなと思うと、別なことがまた入ってきてできないという状態がずっと続いてきて、ちょっと今はストレスがたまっています。

伊藤光一 あまり情報は入れないほうがいいですね。

伊藤 いえいえ、それでも情報を求めているんですよ。この間あなたがやってくださった田川さんのあれは、今、朝日に交渉しています。

伊藤光一 先生が一度電話をといた話でした。

伊藤 そうしますけれども、とにかくまだ朝日がどういう返事をくれるか待っているんですよ。

塩崎 リストを作って、日本近代史料の分はどれぐらいの期間で、科研費は？

伊藤 2年です。だけどいちおうある程度成果を作って、それでもう一回トライしようと思っていますけれども。そのメンバー作りでもあるわけです。なかなか本当に自分で「どうしてもこの史料を」と思ってやる人が少ないですね。僕が知っている限りでは塩崎さんとか、有馬くんも少しやっているけれども、そんなにたくさんはいないように思うんですね。これはちょっと増やしていかないと大変だと。

塩崎 外国にも広げるんですか。

伊藤 日本関係のものを広げようと思っていますけれども。

塩崎 スタンフォードのフーバーにある分とか……。

伊藤 いまあの情報は、この間どうしたんだったかな。あそこにあるフーバーのイースト・エイシャン・コレクションにあった未整理物は、かなり整理が終わって、フーバーのほうに、研究所のほうに移管したという話を聞きましたけれども。

塩崎 僕は昔、あそこにミセス・モーハットというか、恵美子さんですか、あの方が親切にしてくれて、地下のほうに日本関係のものがあって、満州国関係のものとかいろいろ、あれはおもしろかったと思います。

伊藤 あれはそのあと、加藤陽子さんに行ってもらって整理をしたんです。ジャパン・ファンデーションがちょっとお金を出してくれたものですから。それでそのある部分、あれはどの部分だったか、目録ができてオープンになったということでした。もちろん中国には、いろいろ日本があそこに置いてきた日本語史料もたくさんあるんで

すが、これはなかなか手のつけようがないので、しばらく様子を見ているわけです。

塩崎 明治期からですか。

伊藤 維新からですね。きょうお話くださったこと以外で、また何かあったら教えてください。どうもありがとうございました。（第7回終了）